

「大東亞共榮圈綜合貿易年表」からみた 1930 年代後半の中国の食料貿易

荒 木 一 視

要旨

『大東亞共榮圈綜合貿易年表』をもちいて 1930 年代後半の中国の食料貿易を把握した。主要な輸出品である卵と茶、主要な輸入品である穀物類という構成は 1920 年代と比較して大きく異なるものではない。ただし、1930 年代後半は日中戦争が始まる時期であるとともに中国の近代工業化が戦前のピークを迎える時期ともされている。こうした時期においても米は主に東南アジアから、小麦は主に欧米から一定量を調達していたことが確認できた。中国の近代工業化を支えた穀物の海外依存という点を指摘できるとともに、当時のアジアの食料貿易を日本などを含めた多国間の枠組みで議論することが求められる。

キーワード：1930 年代後半，中国，食料貿易，『大東亞共榮圈綜合貿易年表』

目次

- I はじめに
- II 1930 年代後半の食料貿易における主要品目
- III 1930 年代後半の中国の食料輸出
- IV 1930 年代後半の中国の食料輸入
 - 1. 穀物輸入
 - 2. 穀物以外の食料輸入
 - 3. 小活
- V おわりに

I はじめに

筆者は 20 世紀初頭におけるアジアの工業化を支えた食料供給の仕組みはどのようなものだったのかという問題意識から研究に取り組んできた（荒木 2012, 2014, 2015, 2016）。その背景にはヨーロッパの産業革命を支えた食料供給を新大陸の植民地に求めるというフードレジーム論の議論がある（フリードマン 2006）。すなわち、図 1 に示すように、工業化、工業生産の拡大はそれを支える多くの工業労働者なしには実現されない。しかしながら、工業労働者は食料生産者ではなく、食料を入手するためには食費を支出しなければならない。このため、国内に大量の工場労働者を抱えるには食料価格を低位に導かなければならない。国内で工業化以前の時代よりも潤沢な食料生産を実現し、食料価格を低位に安定させることができれば、海外からの安価な食料輸入に依存しない限り、多くの工業労働者を抱えることはできなかったと考えるのである。

荒木（2019）では『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』をもちいて 1920 年代の近代工業勃興期にある民国期中国の食料貿易を論じた。そこからは、農業生産が大きな進展をみせない中で、増加する工業労働者の食料供給を海外に依存する姿がうかがえた。本論文ではその後の 1930 年代の中国の食料貿易を検討する。1930 年代は中国の近代工業化が戦前のピークを迎える時期である¹⁾とともに、1931 年の満洲事変を経て、1937 年の盧溝橋事件と日中戦争が激化していく時期でもある。また、1939 年は日本が帝国の枠組みの中に築いていた米の自給システムが崩壊した年でもある（荒木 2018）。このような時期、中国が食料供給、特に穀物の供給の仕組みをどのようにして構築していたのか、荒木（2019）に指摘した 1920 年代の中国の食料の海外依存はその後どのように姿を変えたのか、あるいは

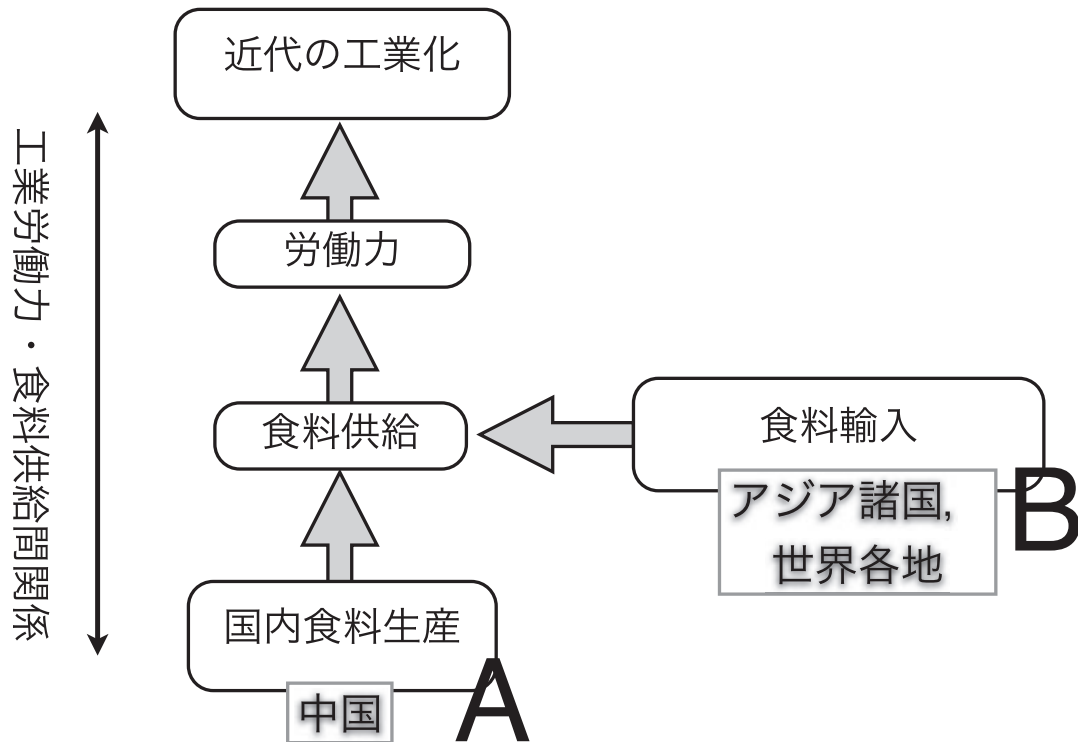


図1 研究の枠組み

初出は荒木（2014）

変えなかったのかを検討したい。

その際、荒木（2019）でも言及したように、この時期の中国の包括的な統計資料を入手することは簡単ではない。特に満洲事変や盧溝橋事件をへて、日中戦争へと移行するこの時期の状況を正確に把握することは困難である。そうした中で着目したのが『大東亜共栄圏綜合貿易年表』である。同年表は神戸商業大学教授生島廣治郎責任編輯として東亜貿易政策研究会から刊行されたもので、第1巻の「泰國」が1942（昭和17）年に刊行されたのを皮切りに、第2巻「中華民國北支那」、第3巻「中華民國總覽」が刊行され、以下第4巻「比律賓」、第5巻「東インド諸島」、第6巻「佛領印度支那」、第7巻「ビルマ」、第8巻上「大日本帝國內地」第8巻下「大日本帝國臺灣・朝鮮」、第9巻「満洲國」と続く。第9巻の刊行が1943年であり、各巻によって、統計年次に若干の差がみられるが、概ね1937年～1940年の期間の複数年次の貿易の動向を把握することができる。また、副題に「世界各国ブロック別」と謳われるように、各品目の輸出入額と数量が国別、地域別に加えてブロック別にも集計されている。無論、ここでいうブロックは1930年代当時のブロック経済を前提にしたもので、英帝国ブロック、米国及属領、中南米ブロック、欧州大陸ブロック、アフリカブロック、近東及び中東国、東亜ブロック、その他の諸国に区分されている。それぞれの範囲は概ね表1に示す通りである。

以上のようにこの綜合貿易年表の特徴は、各国で異なる貿易品目の分類を一応の基準に基づいて再配列し、比較できるようにしたことである。具体的には大蔵省編纂の日本貿易年表の分類に基づいて、他の諸国のものを再配列したとある（同書2p）。無論、その作業が全ての品目において正確なものでないことは、同書においても示されている。そうした限界はあるものの、統一的な貿易品目の分類によって比較できるようにした意義は評価すべきである。本論文の対象とする中華民國に関しては中華民國28年及び29年の海関中外貿易統計年刊²⁾をもとにしつつ、大蔵省の日本貿易年表の分類に再配列したことがうかがえる^{3) 4)}。『大東亜共栄圏綜合貿易年表』は当時の日本が海関統計（中華民國海関総稅司署編纂）に準拠して作成したものであり、資料としての有効性を検討する余地は残されているが、ここでは当時の中国の動向を把握できる限られた資料の中で一定の情報源とみなすことができるのではないかと考えた。



表1 「大東亞共榮圈綜合貿易年表」に示されるブロックの範囲

英帝國ブロック	英本國及自治領	英吉利 加奈陀 濠洲 新西蘭 南阿聯邦 印度
	亜細亜植民地	香港 海峡植民地 緬甸 セイロン パレスティン
	欧洲	ジブラルタル マルタ
	英領中米諸國	
米國及属領	米國	
	属領	比律賓 米領太平洋諸島 米領中米各地
中南米ブロック	中米	墨西哥 其他ノ中米諸國
	南米	エクアドル、ペルー、ウルグアイ 智利 蘭領西印度
欧洲大陸ブロック		獨逸 チェツコスロバキア 仏蘭西 白耳義及ルクセンブルク 和蘭 丁抹 諸威 瑞典 羅馬尼 伊太利 瑞西 葡萄牙 芬蘭
阿弗利加ブロック	埃及	
	佛領	アルジェリア モロッコ チュニス
	伊領	トリポリ
近東及中東國		シリア
東亜ブロック	日滿支國	日本 朝鮮 臺灣 閩東州
	中立國	佛領印度支那 泰 蘭領印度 澳門 廣州灣
	英米國	香港 海峡植民地 比律賓 緬甸
其他ノ諸國		

本論文では総合貿易年表のうち、特に第3巻「中華民國總覽」を主たる典拠として1930年代後半の中国の食料貿易を明らかにする。なお、ここで対象とする食料貿易の範疇であるが、同貿易年表の「第一篇 世界各ブロック別輸出入年表」の「第一表 重要輸出品貿易年表」から「第I部 穀物、穀粉、種子」「第II部 飲食物（煙草ヲ含ム）」「第III部 畜産及飼料」「第IV部 油脂及同製品」「第V部 肥料」まで、「第二表 重要輸入品貿易年表」から「第I部 穀類」「第II部 飲食物（煙草ヲ含ム）」「第III部 毛皮、獣皮、骨及毛（同製品ヲ含ム）」「第IV部 油脂及同製品（蠟ヲ含ム）」「第V部 肥料」までとした。いずれも、荒木（2019）の『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』との比較を前提とした品目である。なお、これ以降は「第VI部 薬材、化学薬品」など工業原料や工業製品などとなる。

この時期の中国の食料貿易については上述の資料に基づいたが、食料供給を考える上では当時の中国の人口を把握しておく必要がある。また、中国の国内の穀物生産量の推移なども検討する余地はあるが、荒木（2019）にも示した通り、この時期の人口や農業生産に関わる体系的な統計は存在せず、正確に把握することはできない。推計にしか過ぎないが、久保・加島・木越（2016）では1931-37年の人口を100とした場合に、1914-17年の人口を86、1931-37年の米生産量を100とした場合に1914-17年のそれを106と推計している⁵⁾。同様に、小麦では1931-37年を100とした場合、1914-17年を86としている。小麦生産量は人口増加と同じペースで増えているが、米はむしろ減少している。また、1930年代の穀物需給から、32,204万人の需要に対して、供給は28,916万人で、差し引き3,287万人の需給差があったとしている。いずれにしても荒木（2019）に示したようにこの時期の中国の穀物需給は供給が追いつかない状況にあったと推察され、それを補う上で輸入は重要な役割を果たしたと考えられる。すなわち、国内の穀物供給量が増えない中でどのようにして近代工業化の進展を実現したのかということであり、図1に則せば、食料輸入に依存するしかないと考えられる。それではどの地域からどのような食料を輸入したのか、これが本論文の主題でもある。

II 1930年代後半の食料貿易における主要品目

表2、3、4は同年表に依拠した主要輸出食料と輸入食料の一覧であり、当該年度の食料以外も含めた貿易額の総額の1%以上を占める品目を示している。なお、輸出総額は1937年が838,255,705国幣元、38年が762,641,058国幣元、39年が1,027,246,508国幣元、40年が1,970,120,647国幣元であり、同様に輸入総額は1937年が419,352,287金元、38年が385,573,715金元、39年が538,855,592金元、40年が748,852,253金元である。輸出総額と輸入総額はこの額を基準とし、表中の歩合もこの数値に対するものである。

輸出食品の主力は飲食物のうち卵製品となり、期間を通じて概ね総額の5～6%を占める。これに次ぐのが畜産及飼料の中の毛皮及皮革や油脂及同製品のうちの桐油であるが、期間のはじめには高い数値を示すが、期間の終わりには3%程度にまで比率を下げる。一方で、豚毛は期間を通じて3～4%程度の水準を維持する。しかしながら、これらは農畜産品ではあるが、厳密には食品ではない。食品に限定すると茶がこれに次ぐ。他に、穀物・穀粉・種子のカテゴリから落花生と採油用種子、飲食物のカテゴリからその他の鮮乾塩蔬菜、生卵、煙草、畜産及び飼料のカテゴリではブタ、牛皮及水牛皮、山羊皮、油脂及同製品のカテゴリから棉子油、落花生油などがあげられる。

これらの品目は『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』による1920年代の主要輸出品目と大きくは変わらない（荒木2019）。すなわち、荒木（2019）でとりあげたのは大豆及び製品（大豆粕、大豆油）、卵、茶、落花生などであったが、このうち大豆やその製品は満洲からの費目であり、本論文の依拠する第3巻「中華民國總覽」には含まれない⁶⁾ことを勘案すると、主要品目は変わっていない。

主要輸入品については米及粳、穀粉及澱粉類、わけても小麦粉を第1に指摘でき、いずれも総額の5%を超える。これに次ぐのがその他の穀類、精糖、煙草、水産物、油脂類などであり期間を通じて数%で推移する。最後が、小麦、豆類、植物湯、パラフィンで、単年度で1%を超えるものである。同様にこれに関しても荒木（2019）で言及した1920年代の主要輸入品である小麦、砂糖、米、タバコ、小麦粉、魚介類と大きく異なるものではない⁷⁾。

以下、輸出入それぞれの主要品目ごとに貿易相手、貿易量、貿易額について検討する。



表2 1930年代後半の中国の主要食料貿易品目（穀物・穀粉・種子）

輸出						輸入					
品目	年度	輸出総額	総計		単価	品目	年度	輸入総額	総計		単価
		に対する歩合	数量	金額	金額／数量			に対する歩合	数量	金額	金額／数量
落花生 脱穀落花生	1937	<u>1.074</u>	463,591	9,003,161	19.42	米及粳	1937	<u>4.288</u>	3,457,251	17,985,331	5.20
	1938	0.799	343,907	6,093,951	17.72		1938	<u>6.442</u>	4,061,231	24,842,336	6.12
	1939	1.043	466,530	10,717,188	22.97		1939	<u>4.182</u>	3,202,167	22,535,958	7.04
	1940	<u>1.245</u>	488,477	24,532,129	50.22		1940	<u>8.449</u>	6,495,269	63,274,218	9.74
採油用種子 胡麻子	1937	<u>1.729</u>	714,329	14,496,898	20.29	小麦	1937	0.632	430,467	2,654,595	6.17
	1938	0.199	82,349	1,522,244	18.49		1938	×	27	257	9.52
	1939	0.281	81,510	2,893,623	35.50		1939	<u>2.749</u>	4,670,837	14,816,134	3.17
	1940	0.594	159,435	11,736,449	73.61		1940	0.777	1,488,510	7,184,744	4.83
						其他ノ穀類	1937	0.061	21,560	255,804	11.86
							1938	<u>1.988</u>	2,243,878	7,666,616	3.42
							1939	<u>3.164</u>	3,185,512	17,051,539	5.35
							1940	<u>2.171</u>	1,770,964	16,264,159	9.18
						豆類	1937	0.012	9,735	53,747	5.52
							1938	0.950	798,311	3,665,253	4.59
							1939	<u>1.110</u>	1,161,690	5,981,779	5.15
							1940	0.650	482,720	4,873,298	10.10
						穀粉及澱粉類	1937	0.958	—	4,017,793	
							1938	<u>6.191</u>	—	23,794,781	
							1939	<u>6.584</u>	—	35,480,288	
							1940	<u>7.343</u>	—	54,990,202	
						うち小麦粉	1937	0.649	303,865	2,724,783	8.97
							1938	<u>5.981</u>	2,547,783	23,063,098	9.05
							1939	<u>5.674</u>	3,572,813	30,576,471	8.56
							1940	<u>6.995</u>	3,203,493	52,383,195	5.15

資料：大東亞共榮圈綜合貿易年表

注：数量単位はキントル、金額は国幣元（輸出）および金元（輸入）

歩合が1を超えるものは太字と下線、5を超えるものは太字と外枠を付した。

表3 1930年代後半の中国の主要食料貿易品目（飲食物）

輸出						輸入					
品目	年度	輸出総額 に対する 歩合	数量	総計 金額	単価 金額 / 数量	品目	年度	輸入総額 に対する 歩合	数量	総計 金額	単価 金額 / 数量
其他ノ鮮乾鹽蔬菜	1937	<u>1.260</u>	—	10,570,109		精糖	1937	<u>2.122</u>	1,570,540	8,900,935	5.67
	1938	<u>1.290</u>	—	9,841,918			1938	<u>2.058</u>	1,032,364	7,938,445	7.69
	1939	<u>1.068</u>	—	10,965,228			1939	<u>3.851</u>	2,253,189	20,755,218	9.21
	1940	0.894	—	17,014,775			1940	<u>3.344</u>	1,637,598	25,046,930	15.29
茶	1937	<u>3.672</u>	406,572	30,787,274	75.72	水産物	1937	<u>1.358</u>	—	5,822,942	
	1938	<u>4.334</u>	416,246	33,054,085	79.41		1938	<u>1.112</u>	—	4,290,525	
	1939	<u>2.957</u>	225,578	30,385,831	134.70		1939	<u>1.252</u>	—	6,748,165	
	1940	<u>5.320</u>	344,925	104,571,195	303.17		1940	<u>1.566</u>	—	11,731,983	
うち紅茶	1937	<u>1.203</u>	115,658	10,085,558	87.20	煙草	1937	<u>2.290</u>	—	9,603,572	
	1938	<u>1.155</u>	108,902	8,808,782	80.89		1938	<u>2.549</u>	—	9,830,802	
	1939	0.880	51,645	9,043,507	175.11		1939	<u>2.790</u>	—	15,035,213	
	1940	<u>1.615</u>	94,614	31,824,720	336.36		1940	<u>2.408</u>	—	18,199,640	
うち緑茶	1937	<u>1.959</u>	153,998	16,422,669	106.64						
	1938	<u>2.832</u>	231,146	21,593,431	93.42						
	1939	<u>1.923</u>	139,125	19,762,234	142.05						
	1940	<u>3.560</u>	221,792	69,091,772	311.52						
獸腸	1937	<u>1.444</u>	27,503	12,111,184	440.36						
	1938	<u>1.019</u>	17,601	7,775,791	441.78						
	1939	<u>1.366</u>	18,731	14,041,234	749.63						
	1940	0.602	12,347	11,872,927	961.60						
生卵	1937	0.910	385,564	7,636,476	19.81						
	1938	0.820	234,724	6,261,157	26.67						
	1939	<u>1.020</u>	263,035	10,479,471	39.84						
	1940	0.670	181,871	13,202,369	72.59						
卵製品	1937	<u>5.389</u>	—	45,176,369							
	1938	<u>5.640</u>	—	43,013,361							
	1939	<u>6.992</u>	—	71,833,591							
	1940	<u>6.088</u>	—	119,953,854							
煙草	1937	<u>1.110</u>	—	9,304,975							
	1938	<u>1.265</u>	—	9,654,023							
	1939	0.954	—	9,808,629							
	1940	0.348	—	6,869,482							

資料：大東亞共榮圏綜合貿易年表

注：数量単位はキントル（生卵のみ千個）、金額は国幣元（輸出）および金元（輸入）

歩合が1を超えるものは太字と下線、5を超えるものは太字と外枠を付した。

表4 1930年代後半の中国の主要食料貿易品目（その他の農畜林産物など）

輸出						輸入							
品目		年度	輸出総額に対する歩合	総計		単価	品目		年度	輸入総額に対する歩合	総計		単価
				数量	金額	金額／数量					数量	金額	金額／数量
畜産及飼料	生畜	豚	1937	0.579	305,402	4,860,223	15.91						
			1938	1.156	407,532	8,822,818	21.65						
			1939	1.467	523,071	15,078,129	28.83						
			1940	0.820	211,025	16,157,733	76.57						
	毛皮、 獸皮、 骨及毛	毛皮及皮革	1937	6.146	—	53,785,336							
			1938	2.547	—	19,426,085							
			1939	2.328	—	23,924,460							
			1940	3.340	—	65,815,932							
	牛皮及水牛皮	牛皮	1937	1.503	146,650	12,602,290	85.93						
			1938	0.559	57,455	4,266,578	74.26						
			1939	0.175	18,410	1,802,548	97.91						
			1940	0.274	11,926	4,414,626	370.17						
	山羊皮		1937	1.587	9,954,836	13,304,353	1.34						
			1938	0.419	3,090,533	3,197,105	1.03						
			1939	0.375	2,081,324	3,854,806	1.85						
			1940	0.700	3,784,704	13,804,323	3.65						
	豚毛		1937	3.330	40,449	27,921,024	690.28						
			1938	3.680	36,338	28,063,597	772.29						
			1939	4.002	33,327	41,117,571	1,233.76						
			1940	4.774	35,385	94,059,406	2,658.17						
油脂及同製品	棉子油		1937	1.187	248,245	9,953,633	40.10	油脂類	1937	1.755	—	7,362,166	
			1938	0.074	13,720	567,576	41.37		1938	2.034	—	7,844,295	
			1939	0.036	8,993	376,316	41.85		1939	2.117	—	11,411,480	
			1940	0.039	7,899	783,701	99.22		1940	1.414	—	10,594,705	
	落花生油		1937	2.067	414,765	17,332,308	41.79	油脂 植物油	1937	0.138	—	582,569	
			1938	1.119	242,515	8,539,185	35.21		1938	0.682	—	2,632,681	
			1939	1.255	282,192	12,877,512	45.63		1939	1.029	—	5,548,151	
			1940	1.238	245,505	24,405,831	99.41		1940	0.275	—	2,066,212	
	桐油		1937	10.718	1,029,789	89,845,563	87.25	パラフィン	1937	0.862	342,310	3,617,644	10,568
			1938	5.144	695,777	39,237,038	56.39		1938	1.065	334,971	4,107,596	12,263
			1939	3.272	335,016	33,614,794	100.34		1939	0.659	280,289	3,554,605	12,682
			1940	2.860	232,472	56,357,844	242.43		1940	0.719	255,642	5,388,838	21,080

資料：大東亞共榮圏綜合貿易年表

注：数量単位はキントル（豚は頭、山羊皮は枚）、金額は国幣元（輸出）および金元（輸入）

歩合が1を超えるものは太字と下線、5を超えるものは太字と外枠を付した。

III 1930年代後半の中国の食料輸出

1920年代の貿易動向を示した『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』によると、当時の輸出の主力は卵、茶、落花生であり、それらの主な貿易相手は、卵が英米独などの欧米諸国、茶がトルコ、ペルシア、エジプト、ロシアなどが中心となる。落花生はオランダ、ドイツ、フランスなどで、桐油は多くが米国向けであった（荒木 2019）。以下、前章で指摘した1930年代後半の主要輸出品としての卵、茶、落花生に着目して具体的に検討する。なお、表5はこれらの品目の主要輸出先を示したものである。また、あわせて食物ではないが、林産物や畜産物についても言及したい。

表5 主要輸出品の貿易相手

	生卵				卵製品			
	1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15	1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15
英吉利	34.1	14.8	27.7	56.7	59.2	53.9	63.1	78.2
香港	19.4	26.7	28.5	17.0	0.9	2.8	0.5	0.9
比律賓	6.8	2.7	14.3	15.8	0.0	0.0	0.0	0.0
獨逸	34.1	46.2	20.4	0.0	15.2	32.2	21.6	1.7
%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
当該品目の輸出額総計	7,636,476	6,261,157	10,479,471	13,202,369	45,176,369	43,013,361	71,833,591	119,953,854

	茶			
	1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15
英吉利	16.9	2.4	0.9	1.8
香港	9.0	53.5	59.9	58.2
米國	9.3	5.8	5.1	5.9
阿弗利加ブロック	35.9	28.7	28.0	15.8
%	100.0	100.0	100.0	100.0
当該品目の輸出額総計	30,787,274	33,054,085	30,385,831	104,571,195

	殻付落花生				脱穀落花生			
	1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15	1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15
加奈陀	0.8	1.3	5.8	32.5	11.1	4.5	15.3	16.3
香港	3.3	2.5	0.7	5.6	7.5	6.1	5.9	8.3
獨逸	7.3	4.2	3.9	-	35.8	9.1	14.4	3.7
仏蘭西	21.5	17.7	20.1	2.7	2.6	3.5	5.1	-
和蘭	34.1	39.4	33.7	1.7	19.9	32.2	12.2	5.6
アルジェリア	5.1	11.1	9.8	-	0.2	0.2	0.1	-
臺灣	-	-	-	-	-	-	1.0	18.8
関東州	0.1	2.3	-	12.4	0.0	1.9	1.9	20.0
%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
当該品目の輸出額総計	3,130,581	3,469,124	4,221,069	2,257,179	9,003,161	6,093,951	10,717,188	24,532,129

資料：大東亞共榮圏綜合貿易年表

注 当該品目の輸出額総計に占める構成比を%で示した。輸出総額の単位は国幣元。



卵

卵は 1920 年代においても有力な輸出品であり、1930 年代においてもその傾向が続く。吉田（2005）によれば、20 年代後半からの南京国民政府の増産策などで、輸出の拡大とともに中国の農村経済の復興を目指したものであったことが指摘されている。当該期間（1937～40 年）においても、生卵で前半は 6～7 百万国幣元、後半は 10 百万国幣元を超える輸出額、卵製品で前半は 40 百万国幣元半ば、後半には 70 百万国幣元、120 百万国幣元の輸出額を記録している（表 3）。生卵と卵製品を合わせて全輸出額の 6% から 8% 程度を占め、茶を凌ぐ最大の輸出食品となっている。なお、卵製品は数量の把握ができないため、単価の変動がわからないものの、生卵に関しては単価が上昇する一方で、輸出量はむしろ減少していることを指摘できる。

表 5 によると、期間を通じてイギリスが重要な輸出先で、特に卵製品においては過半を占めている。また、生卵に関しては香港が 2～3 割程度を占め、イギリスと香港でかなりのシェアを占める。これに次ぐのがドイツで、1940 年に急減するものの生卵、卵製品ともに 2、3 割以上のシェアを持つ。さらに生卵で 1 割前後のシェアを持つフィリピン、表中には示していないが、1940 年に卵製品で 1 割程度のシェアを持つ関東州があるものの、イギリスやドイツのシェアに比べると多くはない⁸⁾。

この時期の卵に関しては英独を中心とするヨーロッパが大きなシェアを持ち、それに香港やフィリピンなどのアジアが続くという傾向が認められる。

茶

表 3 によると茶の輸出額は 1937、38、39 年は 30 百万国幣元あまりで推移しているものの、1940 年には 104.6 百万国幣元と大きく増加する。一方で輸出量は大きな増加が認められず、1937 年と 40 年の比較ではむしろ減少している。また、紅茶と緑茶という内訳の構成比からは緑茶の占める割合が増加している。一方で、単価は上昇基調にあり、1937 年と 1940 年の間に 3 倍近くの上昇をみる。

茶の主要な輸出先は表 5 に見るように 1938 年以降およそ半分が香港に仕向けられている。これに次ぐのがモロッコを中心としたアフリカとなる。一方で 1920 年代に認められた、トルコ、ペルシア、エジプト、ロシアなどへの輸出は極めて少量になっており、輸出先の変化があったことがうかがえる。なお、1937 年にはまだアフリカブロックが一定のシェアを有していることから、変化はこの時期のものと推察できる。

落花生

落花生は期間を通して概ね 450 千キントル余で推移し、1939 年から 40 年にかけて単価が倍近くになるという金額の変動はあるものの、輸出総額に占める割合は 1% 余で大きな変動はない。表 5 によると主要輸出先はヨーロッパで、フランス、オランダ、ドイツなどが中心となる。また、アルジェリアも一定のシェアを有する。英ブロックでは香港の他、1940 年のカナダがすくなくならぬシェアを持つ。いずれにしても落花生は主にヨーロッパ向けということができ、1920 年代と大きな違いは認められない。

桐油と毛皮・獣皮

これらの品目は食品ではないものの、特に桐油は 1931 年に 20 百万海関両の輸出額があり、落花生に次ぐ品目であった。また、当時の主要輸出先は米国であった（荒木 2019）。しかし、30 年代後半において桐油は百万キントルから 0.2 百万キントルへと輸出量を減らし、総輸出額に占める比率も 1937 年の 10.7% から 40 年の 2.9% と大きく後退する（表 4）。その中心となるのが米国向け輸出で 1937 年には 6 割以上が米国向けであったものが、翌年以降大きくシェアを減らす。一方でシェアを増やすのが香港である。いずれにしても、香港を含めた英米圏向け輸出が期間を通じて桐油輸出の 9 割近くを占めていることには変わりはなく、米国向けの減少が全体の輸出量を押し下げたといえる⁹⁾。

毛皮や獣皮類では豚毛がまとまった輸出額を示している（表 4）。当時の中国の皮革業については吉田（2009）があり、第一次世界大戦に伴う輸入代替としての上海の製革業の成長に焦点が当てられるものの、輸出についての言及はほとんどされていない。また、当時の中国からの骨粉の対日輸出に関しては吉田（2011）があるが、本年表からは

その動向を読み取ることはできなかった。いずれも食品ではないのでこれ以上は触れない。

以上、1930年代後半の主要な食料輸出を検討してきたが、荒木（2019）でとりあげた1920年代の状況と比べて、一部で輸出先の変化は認められたものの、卵と茶という品目に大きな変化はない。また、金額的には大きな増加を認めるものがあるが、それは単価の変動によるものであり、輸出量が増加したわけではない。このように1930年代後半においても中国からの食料輸出において、米や小麦などの穀物類は主要品にはあがってこない。木越（2020）が指摘するようにこの時期の中国の一次産品の輸出は、工業国への原料提供と国内の工業化に貢献したとする解釈も妥当なものであろう。その意味で、ここにある桐油や毛皮・獣皮はまさに、原料輸出の側面を持つものであり、食料供給という枠組みの域外にある。逆に農業の近代化が進まない中で、一定程度であれ国内の工業化に貢献するのであれば、それらの工業労働者に対する食料供給の必要は高まるのであり、その供給源としての食料輸入の意味はますます増大するといえる。

IV 1930年代後半の中国の食料輸入

前章と同様に1920年代の貿易動向を示した『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』によると、当時の輸入の中心は小麦、砂糖、米、タバコ小麦粉、魚介類であった（荒木 2019）。また、輸入先については、小麦はオーストラリアを筆頭に米加、砂糖は香港、蘭印、日本、米は香港、英印、仏印、シヤム、タバコは米国、小麦粉は日米、魚介類は香港、日本が確認されている。以下、穀物とそれ以外の食料に大別してこれら個別の品目ごとに1930年代後半に至る変化を検討する。なお、表6はこれら品目の主な輸入先である。

1. 穀物輸入

米及び粳

表2からはこの時期の米及び粳の輸入量が1940年に大きく増加していることが読み取れる。1937, 38, 39年は3～4百万キントルで推移していたものが、1940年には6.5百万キントルに増加するとともに、輸入額も3倍近く跳ね上がる。特に、1937年時点では単価が5.2金元／キントルだったものが、1940年には9.7金元／キントルと大きく上昇し、同様に総輸入額に占める比率も上昇する。当時の日本は、1939年に西日本から朝鮮半島を襲った早魃による食料事情の逼迫、1940年からの配給・供出制度の本格化、1941年の食糧管理法の成立へと至る時期である（大豆生田 2007, 荒木 2018）。特に当時の日本は1939年を契機にそれまでの帝国の領域内での米自給から、東南アジアに依存した米供給体制へと変貌を遂げる。ちょうどこの時期に中国の穀物貿易においても米価の高騰が起こっていたことになる。当時の日本で認められた混乱は少なからず中国大陆にも影響を及ぼしていたと考えられる。

次に輸入先の動向である（表6）。主たる部分を支えるのは仏領印度支那と泰（タイ）で、変動はあるものの期間を通じ輸入量、輸入額の8割程度を占める。これに次ぐのが緬甸（ビルマ）で、1937, 38年には輸入額の15～20%程度を占めるものの、39, 40年には5%以下となる。同様に輸入量でも前半は15～20%程度を占めるものの、後半には5～7%程度に減少する。一方でシェアを増加させるのが日本で、1937年の輸入額のシェアは0.1%であるものの、それ以降は5%前後を有するようになる。表中には示されていないが、輸入量でも1937年には1,613キントルで0.1%に満たないシェアだったものが、38年には157千キントル、39年には83千キントル、40年には274千キントルで米及び粳の輸入量において4.22%のシェアに至った。同様に朝鮮からは1939年に輸入が急増し、輸入額のシェアが20%を大きく上回る。輸入量においても497.0千キントルで同シェア15.5%となる。また、この時期の単価は1937年の約5金元から1940年の約10金元に高騰することはすでに示したが、大きなシェアを有する仏領印度支那や泰からの輸入単価がほぼこの水準で推移する。一方、緬甸からのものは期間を通じて5～6金元と大きな変動はない。逆に、日本からの輸入単価は1937年の6.9金元から1939年の11.1金元、40年の11.6金元と大きく上昇し、朝鮮からのものも1937年に8.6金元だったものが38年に11.1金元、39年位10.7金元、40年に12.2金元と高水準で推移する。1939年に確認できた日本での米自給に関する混乱の影響が中国の米輸入にも影響を及ぼしていることがうかがえる。



表 6 主要輸入品の貿易相手

		米及び粳			
		1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15
英領	緬甸	15.4	18.3	4.8	4.5
東亜ブロック	日本	0.1	5.5	4.1	5.0
	朝鮮	0.0	4.0	23.6	1.2
中立圏	佛領印度支那	52.5	25.6	27.9	61.1
	泰	31.5	42.0	35.6	26.8
	その他	0.6	14.2	8.1	7.6
	%	100.0	100.0	100.0	100.0
当該品目の輸入額総計		17,985,331	24,842,336	22,535,958	63,274,218
		小麦			
		1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15
英領	豪州	100.0	-	65.7	64.8
米国		0.0		34.3	34.2
その他		0.0	-	0.0	1.0
	%	100.0	-	100.0	100.0
当該品目の輸入額総計		2,654,595	257	14,816,134	7,184,744
		小麦粉			
		1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15
英領	豪州	46.3	45.1	51.6	43.9
米国		24.3	7.0	36.1	33.4
日本		1.5	43.2	8.3	21.0
その他		27.8	4.7	4.0	1.7
	%	100.0	100.0	100.0	100.0
当該品目の輸入額総計		2,724,783	23,063,098	30,576,471	52,383,195
		精糖			
		1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15
香港		20.7	31.0	7.5	26.9
日本		36.4	40.1	38.4	15.1
臺灣		9.1	0.9	30.3	29.4
蘭領印度		33.1	23.5	6.8	24
	%	100	100	100	100
当該品目の輸入額総計		8,900,935	7,938,445	20,755,218	25,046,930
		水産物			
		1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15
香港		10.2	11.6	3.0	4.0
海峡植民地		7.2	7.9	4.5	2.1
日本		54.2	46.7	63.8	68.6
朝鮮		1.4	1.1	1.3	7.3
関東州		0.9	3.2	3.9	7.3
澳門		3.0	8.6	12.2	6.8
その他		23.0	20.9	11.3	4.0
	%	100.0	100.0	100.0	100.0
当該品目の輸入額総計		5,822,942	4,290,525	6,748,165	11,731,983
		煙草			
		1937 昭和 12	1938 昭和 13	1939 昭和 14	1940 昭和 15
米国		89.9	88.9	64.8	75.0
日本		3.2	2.1	4.1	4.7
その他		6.9	9.1	31.1	20.4
	%	100.0	100.0	100.0	100.0
当該品目の輸入額総計		9,603,572	9,830,802	15,035,213	18,199,640

資料：大東亞共榮圏綜合貿易年表

注 当該品目の輸入額総計に占める構成比を%で示した。輸入総額の単位は金元。

期間を通じて米及び粳の輸入は3～6百万キントルと変動はあるものの、相当量を維持し、減少傾向もみられない。また、単価は一貫して上昇基調にあり、輸入額は大きく増え、総輸入額に対する歩合も拡大を続ける。1940年における輸入総額に占める割合は8.4%と1割弱をしめる。これは後述の穀粉および澱粉類に次ぐものであり、食料輸入において穀物の占めるシェアが大いなることを指摘できる。1920年代の状況を把握できる『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』とは品目名などの基準が異なり、直接の比較はできないが、当時から米が一定の輸入のシェアを有する品目であったことは明らかである（荒木 2019）。『大東亞共榮圈綜合貿易年表』においても「米及び粳」が相当のシェアを有していることが確認できたことから、1920年代以降において米や麦などの輸入が中国の食料消費において一定の役割を果たしていたといえる。

また、『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』によれば、米輸入の大部分を占めていたのが香港で、1931年には64百万海関両のうち43百万海関両をしめていた。これに続くのが英領インド（実質的にはイギリス統治下のビルマ）の8百万海関両、仏領インドシナの5百万海関両、シャムの4百万海関両であった。1930年代後半の香港のシェアは数%¹⁰⁾となるものの、ビルマ、仏領印度支那、タイは20年代と同様に主要貿易相手となっている。特に仏領印度支那とタイの拡大を指摘できる。この時期も1920年代からの東南アジアからの米輸入という構図は続いているといえる。その一方で、1939年の日本の米需給に関する混乱の影響も一部に認められた。

小麦

この時期の小麦輸入であるが、1937年には輸入量のほとんどがオーストラリアであり、1940年にもなお6割余をしめるものの、徐々にシェアを下げていくことがうかがえる。それを埋めているのがアメリカ合衆国からの小麦である。小麦はこの英米圏からの輸入でほぼ全量を占める。

荒木（2019）にも示したが、中国の小麦輸入が急増するのが1931年であり、『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』では22.8百万擔¹¹⁾（約114万トン）の輸入量が確認できる。直接の比較はできないが、『大東亞共榮圈綜合貿易年表』では、1937年に430,467キントルで2,654,595金元、1939年に4,670,837キントルで14,516,134金元、1940年に1,488,510キントルで7,184,744金元の輸入が認められる（表2）¹²⁾。これはそれぞれの年度で輸入総額の0.6%（1937年）、2.7%（1939年）0.8%（1940年）に相当する¹³⁾。また、同じく『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』において小麦の輸入の急増した1931年の全輸入額に占める割合は6.1%（1,448百万海関両のうち88百万海関両）で、主要な相手先はオーストラリアで57百万海関両を占め、これに続くのがカナダの15百万海関両とアメリカ合衆国の14百万海関両であった。1931年の急増時と同様のシェアは有していないものの、オーストラリアと北米を中心とした供給地は当時と同じである。

小麦粉

上記のように小麦のシェアは米及び粳に比べて大きくはないが、米及び粳に匹敵するシェアを持つのが穀類及び澱粉類、わけても小麦粉である（表2）。小麦粉は期間中に輸入量、輸入額とも増加し、1937年から38年にかけて急増していることが認められる。表6にみるようにここでもオーストラリアとアメリカ合衆国は重要な貿易相手となっているものの、全体に占める割合は小麦ほどに高くない。その一方、1937年から38年にかけて日本からの輸入が急増し、1940年においても2割程度を占めるのは日本からの小麦粉である。変動はあるものの、日本からの小麦粉輸入額がオーストラリアや米国からの輸入と遜色のないレベルにあることが確認できる。『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』では1931年に輸入額は29百万海関両、うち日本が13百万海関両、アメリカ合衆国が9百万海関両、香港が6百万海関両と続くように、日本からの小麦粉輸入がかなりのシェアを有している傾向は1930年代初めにも認められる。その一方、1930年代の日本は大量の小麦をオーストラリアから輸入していた時期でもある。荒木（2015, 2018）では1930年代初頭に6百万石程度あった日本の小麦輸入が百万石以下にまで減少するとともに、国内での増産が図られたと示されている。こうした小麦が中国に渡っていたことを示すものでもある。

日本からの小麦輸入に関してはさらに議論の余地があるが、1930年代後半の中国の小麦粉の輸入は大部分をオーストラリアとアメリカ合衆国に依存していた。米及び麦が東南アジアの仏領印度支那とタイであったこととあわせ



て、戦前の中国が近代工業化のピークを迎える 1930 年代後半の食料貿易の中心には米と小麦（粉）という穀物輸入があったといえる。

2. 穀物以外の食料輸入

『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』によると、1920 年代に穀物以外で一定の輸入が認められたのは、砂糖、タバコ、魚介類であった（荒木 2019）。一方、『大東亞共榮圈綜合貿易年表』による 1930 年代後半のこれらの輸入状況は表 3 に示される。すなわち、精糖、水産物、煙草であり、精糖は総輸入額の 2～4% 程度で推移、タバコは同 2.3～2.8% で推移、水産物は同 1.1～1.6% 程度で推移する。なお、水産物の中心は乾魚介、塩魚、昆布及び海苔であった。以下、品目別に検討する。

精糖

輸入量は 1939 年に急増をみる。また、単価も上昇基調にあるため、輸入額は期間前半の 8～9 百万金元から後半の 20 百万金元、総輸入額における構成比も 2% 台から 3% 台に上昇する（表 3）。主要な輸入先は台湾が 7.4 百万金元、香港が 6.7 百万金元、蘭印が 6.0 百万金元、日本が 3.8 百万金元などであり、期間中に大きく貿易量を増加させるのが台湾である（表 6）。香港や蘭印からの輸入が 2～3 倍前後であるのに対し、台湾は 10 倍以上になる。なお日本からの輸入額はそれらに比べると大きな変化はない。『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』によると、1920 年代には香港と蘭印、日本が主要相手国であり、台湾がこの時期に急速に伸長したといえる。

水産物

水産物に関しては主要輸入先は日本であり、1940 年の水産物輸入額総計 11.7 百万金元のうち 8.0 百万金元を占めるように、期間を通じて概ね 5 割以上のシェアを確保している。これに次ぐのが朝鮮と関東州の 0.9 百万金元（7.3%）、澳門の 0.8 百万金元（6.8%）、香港の 0.5 百万金元（4.0%）などである（表 6）。1920 年代の『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』では香港と日本が 2 大輸入先であり、1930 年代に日本のシェアが大きく伸長したといえる。また、表 6 にみるようにこの期間内においても輸入額は 2 倍以上に伸長し、その中でも日本からのシェアは拡大する。本綜合貿易年表の水産物の項に内訳として示されているのは、鮮魚、乾魚介、鹽魚、昆布及び海苔である。中でも特に大きく伸長したのは昆布及び海苔で、1937 年の 1.0 百万金元から、40 年の 2.9 百万金元へと 3 倍近い。鮮魚や乾魚介はほぼ 2 倍程度、また、鹽魚も 1938 年から 1940 年で 2 倍程度である。

朝鮮からの水産物輸入は 1940 年に急増し、1939 年の 71 千金元から 40 年には 856 千金元とそれ以前の 10 倍以上の輸入額となる。主力は鮮魚で 6 割を占める（1940 年）。関東州からの輸入も朝鮮ほどではないが、1940 年に大きく増加し 0.9 百万金元となる。その主力は昆布及び海苔と乾魚介、鹽魚（いずれも 0.2 百万金元程度）で、逆に鮮魚の比率は低い。澳門や香港からの輸入はほとんどが鹽魚でその構成比は期間を通じて変わらない。

なお、本年表では寒天は水産物とは別項目として建てられているが、付記しておきたい。金額自体は大きくないものの寒天の輸入も 1937 年の 32 トン、68 千金元から 40 年の 114 トン 265 千金元と大きく増加し、寒天の総輸入量における日本のシェアも 8 割を超える。

煙草

煙草の輸入額は期間を通じて倍増するが総輸入額も増えており、総輸入額に占める比率は 2% 余りで大きな変化はない（表 3）。主要な輸入先は米国で、期間前半には 9 割近くを占め、期間後半にも 7 割程度を維持する（表 6）。また、タバコの輸入の多くが米国という傾向は 1920 年代にも確認でき（荒木 2019）、輸入先にも変化は認められない。

3. 小活

ここまで 1930 年代後半の主要な食料輸入を検討してきた。前章と同様に荒木（2019）でとりあげた 1920 年代の状況と比べて、小麦粉の比重の拡大など一部で変化は認められたものの、米と小麦（粉）を主体とする穀物輸入が大き

な位置を占めること、穀物以外では砂糖、水産物、タバコが一定の貿易額を有することなど、大きな変化は認められなかった。1930年代後半の食料輸入の大部分を占めるのは米と小麦（粉）という穀物類であり、1920年代に引き続き、少なからぬ量の穀物を海外に依存し続けていたといえる。近代工業が戦前のピークを迎えるとされるこの時期に中国の全輸入額の1割を超える額が穀物輸入に充てられたことに留意したい。

さらに、1939年に日本でみられた米需給に関わる混乱が、中国の穀物貿易にも一定の影響を与えたことを指摘できる。すなわち、1939年から1940年にかけての米の輸入量の急激な変動、輸入先のシェアの変動である。

V おわりに

『大東亜共栄圏綜合貿易年表』第3巻「中華民國總覽」に基づいて、1930年代の中国の食料貿易を検討した。この時期の中国からの食料輸出の主力は卵と茶で、1940年には双方ともに輸出総額の5%をこえる。これに同1%余の落花生が続く。卵の輸出先は香港を含む英国が首位でこれにドイツが続き、茶は香港が中心でこれにモロッコなどが続く。落花生はフランス、オランダ、ドイツなどのヨーロッパ諸国向けが中心であった。これに対して、輸入品の主力は米と粳、小麦と小麦粉などの穀物類が大きな位置を占め、タバコや水産物がこれに続く品目であった。総輸入額に占める米と粳の比率は1940年に8.4%、小麦粉のそれは約7.0%である。なお、タバコは同2.4%、水産物は1.6%で、食料輸入額の多くが穀物で占められていることがうかがえる。また、1940年の米と粳の貿易相手は仏印とタイ、ビルマで9割を超え、小麦粉ではアメリカ合衆国とオーストラリアで78%を占め、残りが日本からの輸入となる。貿易相手に関しては若干の変動が認められたものの、貿易品目に関しては上記のように1920年代との間に大きな違い、構造的な変化は認められない。すなわち、1920年代に引き続き、近代工業化の進む1930年代にも多くの穀物を対外依存していた中国の姿をみることができる。

明治期に工業化を推し進めた日本は外米を導入することで安価な米の供給を実現した(持田 1969, 荒木 2019)。「アジア間貿易」(杉原 1996)を唱えた杉原も「アジア間貿易を支えた農民、労働者の追加的購買力の大宗は、実は綿布や雑貨に向かったのではない。エンゲル係数の極めて高いこの段階では購買力は主として主食用穀物や若干の香辛料、海産物などに向かった。中でも米が彼らの支出に占める位置は決定的に重要であった。」(杉原 1985: 34)と戦前のアジアの米需要の重要性を説いている。また、「安価な基本食糧の確保は一方で日本の工業化の基礎となり、アジア内国際分業体制の成立を促進するとともに、他方では日本の対欧米輸出競争力の強化にも貢献したいちがいがない。」(杉原 1985: 38)とし、工業化の基礎としての安価な食料供給、及びそれをアジア間貿易が支えたことを論じている。このような解釈は日本だけではなく、中国の近代工業化においても当てはめることができる。

中国のみに着目した場合、穀物の海外依存という傾向は1920年代と大きく異なるものではないともいえる。しかし、1930年代は満州事変を受けてアメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアからの対日小麦輸出が急速に減少していく時期である。1930年代初めの日本の輸入量は年間4~5百万石程度であったものが、30年代末期には百万石を下回る。こうした時期にあっても中国は米豪から相当量の小麦を調達していたことがうかがえる。また、1939年は日本の米の海外依存が大きな変貌を余儀なくされ、東南アジアからの調達に舵をきる年であるが、中国はそれ以前から東南アジアからの米調達を続けてきたこと、1939年と40年の間に価格の急上昇が認められることも注目できる。こうしたことは一国の食料貿易のみを追跡しても把握できないことであり、当時の東アジアをめぐる食料貿易を多国間の関係から把握していく必要がある。

付記

本論文は1940年代前半に刊行された統計資料から当時の食料供給を論じようとするものであり、「大東亜共栄圏」をはじめ地名表記などは当時の呼称に基づき、原典の表記をそのまま用いた。例えば、「台湾」や「朝鮮」は当時の植民地の呼称として使用し、「フランス領インドシナ・仏印」「オランダ領東インド・蘭印」なども同様である。なお、煩雑さを避けるため地名等の旧字体は新字体表記とした。例えば、「臺灣」を「台湾」とした。ただし、統計の名称を含めて、文献や資料の名称を示す際には、旧字体を用いた。なお、本論文の内容は2021年9月の日本地理学会秋

季学術大会において発表した。

注

- 1) たとえば、久保（2009）では戦前のピークを1936年としている。
- 2) 綜合貿易年表の例言によると、本統計の数値は、海関中外貿易統計年刊、巻一上冊「貿易報告」、下冊「進出口貨物類編国別表」、巻二「進口貨物類編」、巻三「出口貨物類編」（上海税務司署統計課編印）に準拠したとある。
- 3) この時期の貿易統計を利用する上での問題点が少なくないことは山本（2011）の指摘するとおりである。特に『大東亞共榮圈綜合貿易年表』では第2巻「中華民國北支那」と第3巻「中華民國總覽」がそれぞれどこまで範囲としているのか明確ではないことを付記しておく。また、統計年度の1937～1940（昭和12～15）年は、第二次上海事変（1937年）をへて、漢口（武漢）や広州の占領（1938年）、重慶爆撃（1939年）と日中戦争が拡大する時期で、原資料とされている海関統計を編纂した中華民國側にも大きな混乱があったことが想定される。
- 4) 同様の統計を用いた大東亞共榮圈の経済史研究には山本（2011）があるが、同書が主たる対象としているのは1940年代前半である。また、同書は日本側からの視点であり中国の食料供給という観点は希薄である。
- 5) Perkins（1969）に基づく。
- 6) 第9巻「滿洲國」が別にたてられている。
- 7) すでに記したように本綜合貿易年表の統計地区区分と『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』のそれが、一致するわけではない。例えば、ここで取り上げる第3巻「中華民國總覽」とは別に第2巻「中華民國北支那」や第9巻「滿洲國」が編集されている。このため両者の貿易量や貿易額を直接比較することには意味がない。ここでは主として全体に占める割合に着目した。
- 8) 中国産鶏卵の日本への輸出がこの時期にみられないことについては、加藤（2008）が三井物産が主導した中国卵から国産卵への転換を指摘している。
- 9) 実際、長沢（1988）が示すように第一次大戦期には桐油は三菱合資会社ロンドン支店が扱う中国産品のうちの販売額の3割余を占める有力な産品であった。
- 10) 1937年に総輸入額の0.1%、38年に2.8%、39年に1.9%、40年に0.6%である。
- 11) 擔（担）は中国の伝統的な重さの単位で1擔が50kgに相当する。
- 12) 『大東亞共榮圈綜合貿易年表』においても原資料には海関統計を用いていることが記されているが、『大東亞共榮圈綜合貿易年表』の対象とする中華民國の範囲がどこまでを示しているのか不明であること、『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』では東北各港、北部各港とされていた港湾が『大東亞共榮圈綜合貿易年表』では、本論文で取り上げる「中華民國總覽」ではなく、「中華民國北支那」や「滿洲國」に掲載されているであろうことなどから、貿易額や貿易量の比較は不可能である。検討においては輸出入総額に対する比率を用いた。
- 13) 1938年は貿易量がわずか27キントルと少ないため記載せず。

文献

- 荒木一視（2012）フードレジーム論と東アジアの農産物貿易。エリア山口，41，52-62。
- 荒木一視（2014）フードレジーム論と戦前期台湾の農産物・食料貿易—米移出に注目した第1次レジームの検討—。山口大学教育学部研究論叢，63（第1部），31-49。
- 荒木一視（2015）食料の安定供給と地理学—その海外依存の学史的検討—。E-journal GEO，9，239-267。
- 荒木一視（2016）新義州税関資料からみた戦前期の朝鮮滿洲間貿易—日本の食料供給システムの一断面—。人文地理，68，44-65。
- 荒木一視（2018）近代日本のフードチェーン —海外展開と地理学—。海青社。
- 荒木一視（2019）近代工業勃興期の中国の食料海外依存 —『中國各通商口岸對各國進出口貿易統計』からみた1920年代の食料貿易—。季刊地理学，71-2，53-73。
- 大豆生田 稔（2007）お米と食の近代史。吉川弘文館。
- 加藤慶一郎（2008）両大戦間期における三井物産の農産物取引 —鶏卵を中心に—。流通科学大学論集—流通・経営編，21-1，151-165。
- 木越義則（2020）近代中国における一次産品輸出産業の形成と発展。社会経済史学，85-4，23-42。
- 久保 亨（2009）20世紀中国経済史の探究。信州大学人文学部。
- 久保 亨・加島 潤・木越義則（2016）統計でみる中国近現代経済史。東京大学出版会。
- 杉原 薫（1985）アジア間貿易の形成と構造。社会経済史学 51-1，17-53。
- 杉原 薫（1996）アジア間貿易の形成と構造。ミネルヴァ書房。
- 長沢康昭（1988）第一次大戦期における三菱合資の海外支店 —ロンドン支店を中心に—。経営史学，23-1，28-51。



- フリードマン・ハリエット著, 渡辺雅男・記田路子訳 (2006) フード・レジーム 食料の政治経済学, こぶし書房.
- 持田恵三 (1969) 米穀市場の近代化 ―大正期を中心として―, 農業総合研究, 23, 1-56.
- 山本有造 (2011) 「大東亜共栄圏」経済史研究, 名古屋大学出版会.
- 吉田建一郎 (2005) 戦間期中国における鶏卵・鶏卵加工品輸出と養鶏業, 東洋学報, 86, 503-534.
- 吉田建一郎 (2009) 19世紀末―1930年代初期の上海における製革業 金丸裕一編『近代中国と企業・文化・国家』ゆまに書房 (立命館大学社会システム研究所叢書)
- 吉田建一郎 (2011) 第一次大戦前後の青島における獣骨と骨粉の輸出について 山本英史編『近代中国の地域像』山川出版社 (計号義塾大学東アジア研究所叢書)
- Perkins, Dwight H. (1969) Agricultural Development in China, 1368-1968. Aldine, Chicago.

(あらき ひとし 立命館大学食マネジメント学部・教授)